

# 庄内竿と魚拓展

81' 82'  
12月2日→1月31日

休館 月曜・12/28 ~ 1/4・1/15

酒田 資料館  
市立

酒田市一番町 8-16

☎ 0234 (24) 6544

主催 酒田市立資料館 / 本間美術館 / 酒田魚楽会

文久三年―慶応三年（一八六三―一八六七）

氏家直綱 鯛鮎摺形巻

長さ十五米にも達するこの長巻には、三十四図の魚拓がある。巻止めに「鯛鮎摺形」とあり、文久二年に始まる巻物に文久三年の魚拓が巻頭におかれている。この鯛鮎（黒鯛）に達しない黄鯛のこゝとは「文久三亥歳孟秋望白未之刻 於東都仙台河岸釣獲之」と書かれている。江戸で釣った鯛鮎の魚拓を国元に送ったものである。

直綱は庄内藩士百三十石の家に弘化二年に生まれたので、文久三年は十八歳に当る。この年の三月「英国軍艦神奈川へ来り、事重大なる旨、飛脚到着。家中の嫡子、二・三男二十一名江戸に登る」と藩の記録にある。この一行の中に直綱がおったものと思われる。

この騒然たる江戸の仙台侯の藩邸のある河岸に綸を垂れる田舎侍、青年直綱が陰暦七月十五日午後二時頃、一尾の鯛鮎を釣り上げ、それを魚拓に



して手紙を添えて国元に送った「江戸でも国元と同じ鯛を釣ることを知って、これからはお勤めにも精が出る」と、誠に颯爽たる魚拓と筆跡である。文久二年の紅鯛は、昭和三十四年『魚拓の会』の会報二号によって、最古の間接法の魚拓として紹介されたものである。

慶応元年―明治三年（一八六五―一八七〇）

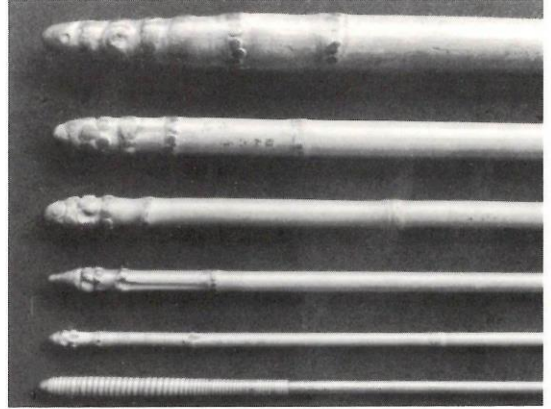
大瀬正山 磯釣勝負絵図巻

長さ五米の巻物に九図の魚拓が並び、毛筆で波をあしらって「後年之を楽しむ」と誌している。

大瀬元治、号正山もまた庄内藩士で百五十石、山浜通りの代官を勤め、戊辰の戦を経て御維新を迎えた人である。魚獲を勝負と呼ぶのは釣り仲間との勝・負のことではなく、魚と自分の対決のことで、正山は晩年になってもその勝負絵図を見るたびに、黒鯛をものした釣場を思い出しては楽しみにしたのであろう。

（佐藤 七郎）

## 庄内竿



江戸時代、城下町鶴岡は十四万石庄内藩主酒井侯の奨励で、身心の鍛練のためにと武芸の一つにあげられ、藩士の間に釣りが盛んとなった。藩公も自ら釣りをされたので、その日の勝負（魚獲）は藩士の面目にかかわることであった。

こともあって、竿の吟味は武士が名刀や名馬を誇りとしたように、名竿を手に入れば自慢し、相当思いきった金を出しても名竿を手に入れた。庄内竿と称される名竿は、全部士族の手になるもので、いわゆる職人の手になる名竿はほとんどない。

庄内竿とは、この地方特産の苦竹という竹で作った竿のことである。苦竹は日本海の潮風が砂丘を越えて平野部に入る地域に生え、潮風が強く当り過ぎると曲ってしまい、達しない処ではグ延びして肉質が軟くなり竿にはならない。したがって苦竹の産地はこの地方でも限られた場所、なかには藩の御止め場になっていて、勝手に切り出すこともできない処もあった。

庄内竿は竹そのものの素質のよさを、どこまでも生して一本の延竿として仕上げるもので、生まれながらにして立派な竿の素質を持った竹でない竿にはならない。何千本か何万本かある竹藪の中から、数本とか数十本とか選んで切り出し、それから四・五年経たないと竿として完成した釣竿にはならない。晩秋から冬にかけてが竹切りの時季で、切ると言うより掘るといった方が良く、それは庄内竿の見どころの一つである美しい根を掘り出すためである。根は鑑賞だけのものではなく、実戦での掌の中のおさまり具合に関係があり、根限り戦うためのものもある。

庄内竿の製法は、生地のまま、皮のついたままに磨き上げ、

美しい光沢もまた見どころとなるので、小枝を払い節削りのときは勿論、竹切りのときから膚を付けないよう注意する。竹藪から採ったままで竿に使えるものは一本もない。火に当て矯木でまず根を矯める。技術的にいって根を満足に伸ばせるということは最高の技術であり、第一回目ひと伸びがその竿の運命の半分を決めてしまう。その竹の癖をこの第一回目で矯めて置かないと、もういい癖をつけることが難しい。こうして最初の伸びが終わると煤棚に上げて乾燥させて、翌春また伸ばす。その後、毎年一べんずつ軽く矯木を当て、四・五年もすればギシット竹が締って癖のでない竿になる。

こうして完成した竿を手にとると、掌に根が具合よく収まり、しっとりとしたある重さを感じられる。また用途によって異なる長短、硬軟の調子の違いがあっても、庄内竿独特の気品の高さコクは、作られるすべての竿に共通のものである。さらに作者は根から一握りほど上に銘を切り、年月と竹の産地を刻んでいる。庄内士族はこの竿で、魚の響きの伝わり方を楽しみ、修業のようになつても釣りをしたものだった。刀剣を鑑賞する人が抜身の刀を手にとると、身についた構えがあるように、庄内の釣士が長竿を手にした姿は少しも危げなところがない。

江戸時代から明治・大正と昭和の初めまで、庄内竿の製竿の技術は陶山運平、丹羽庄右衛門、上林義勝、中村吉次と引き継がれた。現在では、昭和の名人と称された山内善作についてその技術を継承した本間祐介（本間美術館長）だけとなった。

江戸末期から明治中頃まで生存した弓師平野勤兵衛は、唐竹四枚合せの極めて精巧な「削り竿」を作った。おそらくわが国の合せ竿の始めと思われる。それを昭和に再現した人に中山賢士がおった。

庄内竿の名竿と称されるものは数が少ない。その価値を知らず保存を粗末にすれば失われていくばかりである。苦竹の産地も区画整理が進み、グラス竿が全盛をきわめる今日では、すでに実用の時代は過ぎたとはいえ、庄内の磯ではまだまだ庄内竿を愛用している釣士を見ることができ、町の竿師の中に再び庄内竿の製竿に意欲を燃している人がいる。

## 摺形（魚拓）

このような名竿を手にした藩士の勝負は、釣魚の摺形として記録された。（魚拓とは記録されてない）天保十年江戸の錦糸堀で釣った尺鮒の魚拓が現在発見されている最古の魚拓で、次いで安政・文久・慶応年間と、江戸時代の魚拓はこの地方に限られている。

### 天保十年（一八三九）錦糸堀の鮒

この鮒の魚拓には寸法が書かれてないが測ってみると尺鮒と違ってよいもので、「天保十年亥二月晦日 於錦糸堀御獲鮒之図」と誌されている。昭和五十一年に鶴岡の林家古文書の中から発見されたもので、天保十年林家は庄内藩百五十石、林治右衛門正中まさなかという人に当り、御部屋御用達、酒井忠器ただかたの長男忠発ただあきの御守添役であった。魚拓には「御獲」とあるので、藩主忠発か若殿忠発のどちらかと思われるが、この年の二月には藩主は国元に居り、江戸の錦糸堀に釣糸を垂れたのは若殿であろう。

十一代の庄内藩主となる忠発は江戸屋敷に文化九年に生まれ、十七歳で田安大納言の姫を妻に迎えたので、若殿とはいえ天保十年は二十七歳である。林治右衛門は春の水温むこの日、深川下屋敷にほど近い錦糸堀に殿のお供をし、殿の釣った見事な尺鮒を魚拓にして国元に報じたものであろう。庄内藩士の手で、しかも江戸で拓されたことに興味深いものがある。

### 安政四年（一八五七）最上川の鯉

昭和三十三年三月、本間美術館で「庄内竿と魚拓」という展覧会に、東京の清水游谷氏の現代魚拓が特別陳列され、同氏も訪れた。古い魚拓として何げなく陳列したこの魚拓が、清水氏によって始めて全国的にも珍しい最も古い魚拓であることを知らされた。そして、それが端緒となって藩政時代の庄内の魚拓が次つぎと発見されるようになった。

「安政四年午六月五日広野村」と誌されている鯉の魚拓は、最上川河岸の部落で新堀の加藤某の釣ったものである。